

— Report —

—実施報告—

「平成22年度 大阪薬科大学実務実習伝達・報告会」

長船 芳和^{*,a}, 佐藤 健太郎^a, 鈴木 芳郎^a, 新田 剛^a,
花山 加代子^a, 長谷川 健次^a, 田中 有香^b, 恩田 光子^b

—Executive Report—

**The Annual Meeting for the Intercommunication and Report on
“Clinical Practice in Hospital and Pharmacy” of Osaka University
of Pharmaceutical Sciences for the 22nd Academic Year of Heisei**

Yoshikazu OSAFUNE^{*,a}, Kentarou SATOH^a, Yoshio SUZUKI^a, Tsuyoshi NITTA^a,
Kayoko HANAYAMA^a, Kenji HASEGAWA^a, Yuka TANAKA^b, Mitsuko ONDA^b

^aClinical Laboratory of Practical Pharmacy for Education, and ^bClinical Laboratory of Practical Pharmacy,
Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan

(Received October 29, 2011; Accepted November 30, 2011)

In this article, we report on the Annual Meeting for the Intercommunication and Report on “Clinical Practice in Hospital and Pharmacy” of Osaka University of Pharmaceutical Sciences, with its background and executive outline of the clinical practice. This meeting, held in our main university hall on May 15th in 2011, included the oral reports by students, panel discussion and confabulatory luncheon meeting.

key words —— clinical practice; annual meeting; practice report; intercommunication

はじめに

平成18年度に薬学教育に新たに6年制が導入され、平成22年度には新教育制度の根幹を成す最初の長期実務実習が実施された。初年度の実習を終え、我々は、実務実習実施部会において実習内容の伝達と報告を目的とする伝達・報告会を提案・企画し、これを開催した。以下、本報では本会開催の背景とその内容の概要を報告する。

1. 伝達・報告会の背景

—実務実習実施の概要

5年次学生は病院実習および薬局実習を各々11週間にわたり行った。実習施設と実習時期につ

いては、病院・薬局近畿地区調整機構主催の担当者会議において、近畿地区内の全薬系大学および薬学部との合議を経て調整が行われ決定された。平成22年度における本学学生（5年次生、225名）の実習期間別と実習施設所在地別の分布を表1に示す。なお、本学学生は、3期ある実習時期のうち、Ⅱ期およびⅢ期のみを用いて実習を行った。これは、本学5年次生の現行カリキュラムではⅠ期の期間中に複数の必修科目の学内履修が設定されている都合によるものであるが、平成25年度実習からはカリキュラムを改訂し、Ⅰ～Ⅲ期の全期を通して実習を行う予定である。また、本学学生は、近畿地区以外の出身地区での実習（いわゆる“ふるさと実習”）を行わなかった。この理由として、実務実習は、本来、学生の所属大学の近

* 大阪薬科大学 臨床実践薬学教育研究室, e-mail: osafune@gly.oups.ac.jp

辺にて大学と十分な相互連携の可能な施設で行うことが望ましいとの所轄官庁の当初の見解に従ったものである。なお、この点については、今後、近畿外地域の薬剤師会および病院薬剤師会との連携を検討し、学生とその父兄の要望をも考慮し、“ふるさと実習”の可能性を探りたいと考えている。

2. 伝達・報告会開催の経緯

我々は、主に以下の4項目の理由により、実務実習の成果や問題点を学内外に報告する場、および実習の実際内容や感想を後進の学生に伝える場の必要性を感じた。

- ①実務実習は長期間にわたる大きな実習（20単位）であり、その内容の報告や成果の総括は学生および学内外の指導教員にとって、（単位認定のための評価とは別に、）必要かつ有意義なことである。
- ②実務実習の実際の指導は学外施設の薬剤師が行う。よって、これら指導者に学生の感想・意見を伝え、今後の指導の参考に供するとともにこれを大学との指導連携の一助としたい。

③実務実習は、学生にとって人的・地理的にも不案内な学外施設で長期間にわたり行われ、これは学生にとって少なからぬ心身ストレスとなると考えられる。よって、実習学生の体験を事前に後進の学生に伝えておくことはこれへの対応として有用である。さらに、後進の学生に、実習への心構えを促し、また効率的学習のための準備を喚起する良い機会となる。

④学内教員、特に臨床特任の指導教員は、実習期間中に実習学生および実習先より少なからぬ相談を受け、これらに即応して実習の遂行に努力してきた。すなわち、長期の実務実習にあつては実習遂行に支障となる種々の問題が生じる可能性があることを痛感した。よって、実際に相談を受けた以外にも、潜在的な問題点を明らかにし、次期実習への対応に役立てる機会を持ちたい。

よって、学内の実務実習実施のための委員会である「実務実習実施部会」に、このような会の開催を提案して了承を得た。その後、本部会が中心となってその内容を企画し準備を進めた。なお、今回は一回の開催にて上記の目的を果たすことを期して「伝達・報告会」とした。

表 1. 所在地別および実習期間別の施設数と学生数

所在地別の施設実数			所在地別・実習期間別の施設数（実習学生数）			
			I 期	II 期	III 期	計
			5/17～7/30	9/6～11/19 ¹⁾	1/11～3/25	
病 院	大 阪 府	72	0 (0)	28+1 (51+4) ²⁾	60 (105)	88+1 (156+4) ²⁾
	京 都 府	10	0 (0)	4+1 (5+4) ²⁾	8 (11)	12+1 (16+4) ²⁾
	兵 庫 県	9	0 (0)	3 (5)	6 (7)	9 (12)
	奈 良 県	12	0 (0)	2 (2)	10 (14)	12 (16)
	滋 賀 県	8	0 (0)	3 (3)	5 (6)	8 (9)
	和歌山県	3	0 (0)	2 (4)	3 (4)	5 (8)
	計	114	0 (0)	42+2 (70+8) ²⁾	92 (147)	134+2 (217+8) ²⁾
薬 局	大 阪 府	127	0 (0)	87 (90)	44 (46)	131 (136)
	京 都 府	14	0 (0)	6 (6)	8 (8)	14 (14)
	兵 庫 県	29	0 (0)	21 (21)	9 (9)	30 (30)
	奈 良 県	21	0 (0)	17 (17)	4 (4)	21 (21)
	滋 賀 県	14	0 (0)	10 (10)	5 (5)	15 (15)
	和歌山県	9	0 (0)	3 (3)	6 (6)	9 (9)
	計	214	0 (0)	144 (147)	76 (78)	220 (225)

1) 一部病院のII期実習期間は10月11日～12月24日。

2) “+数”は10月11日～12月24日の実習期間についての数。

3. 伝達・報告会の内容

本会は、2011年5月15日（日）に、本学教員、本学学生（6年次および5年次学生）および学外実習施設の指導者（15病院18名、41薬局61名）の参加を得て、以下に示す三部構成にて行われた。図1に本会の次第を示す。

3-1. 実務実習体験報告

5名の6年次学生が、体験した実習の内容とその成果、または実習自体について考察したことを口頭発表し、留意すべき点や反省点、モチベーションが上がった点、事前に学習すべき項目などについても述べた。【発表1】から【発表5】に発表内容のパワーポイント原稿を示す（掲載については当該実習施設ならびに発表者の同意を取得済み）。また、聴衆との間に質疑応答も行われた。

3-2. パネルディスカッション

5名の口頭発表学生と病院および薬局からの実習指導者をパネリストとして、「5年次生に伝えたいこと（①事前に準備・勉強しておくの良いもの ②私はこうして問題を解決した ③実習はこうあってほしい）」をテーマとして討論を行った。さらに、実習指導者からは、実習後に感じた施設側の反省をも踏まえ、これからの実務実習をいかにより良いものにするかなどの有意義な意見も聞くことができた。これら内容は、次年度の実習実施に関して、実習を控えた学生にとって、また大学教員にとっても大いに参考になるものであった。

平成22年度 大阪薬科大学「実務実習伝達・報告会」

日時：平成23年5月15日（日）13時～17時

場所：大阪薬科大学 D 棟講堂（第一部・二部）、食堂（第三部）

13：00 開会の辞 千熊 正彦（学長）

13：10 第一部 実務実習体験報告 座長 恩田 光子（臨床実践薬学研究室）

6年次生 森川 祥彦（臨床実践薬学研究室）

五十嵐圭史（医薬品化学研究室）

川端 秀明（生体機能診断学研究室）

井上 味波（臨床薬剤学研究室）

沼田 浩貴（薬剤学研究室）

14：10 第二部 パネルディスカッション～5年次生に伝えたいこと

座長 長船 芳和、鈴木 芳郎（臨床実践薬学教育研究室）

コメンテーター 谷澤 靖博 先生（大阪府薬剤師会 常務理事）

山本 克己 先生（大阪府病院薬剤師会 副会長）

（大阪警察病院 薬剤部長）

15：00 閉会の辞 荒川 行生（実務実習等専門委員会委員長）（臨床実践薬学研究室）

15：30 第三部 意見交換会 司会 佐藤 健太郎（臨床実践薬学教育研究室）

挨拶 辻坊 裕（教務部長）

図1. 「実務実習伝達・報告会」次第

3-3. 意見交換会

食堂にて、立食形式で軽食を摂りながら、学生、本学教員と実習施設の指導者の間で自由な意見交換を行った。なお、今回の意見交換会に参加いただいた施設にて実習を行った学生は積極的に参加し、実習指導を謝すとともに、実習に対する感想を述べ、実習指導者と懇談した。

おわりに

多くの学生は、実務実習において、大学で学んだ内容をどの程度活用できたか、逆に大学で学べなかったことがどれ程あったかを実感し、そして、薬剤師となるにあたり、そのための知識・技能・態度の修得に医療現場での実習が如何に重要かを体得したと思われる。さらに、患者、指導者および医療スタッフを含めての実習環境が一般社会であったことより、実務実習は、社会人、医療人としての常識や通念、コミュニケーション力を

学生自らが涵養するよい経験となったであろう。

このたびの伝達・報告会は、このように、本学において新しい薬学教育の中核を成す実務実習を総括し、さらに今後の実務実習を真に有意義なものとするために企画され実施されたものである。前項「3.」に示したように、伝達・報告会はつつがなく行われ、所期の目的を一定程度に果たしたと思われる。よって、今後においても、その形式や内容を改良して伝達・報告会を開催し、ますます実務実習に資するよう充実したものにすることを期したい。なお、我々は、今回の伝達・報告会とは別に、実習学生に対して実習終了後に実習に関するアンケート（実習で得たもの・良かった点、実習で期待したが得られなかったもの・不満だった点、自己反省点、実習の前後で変わった点、モチベーションが上がった点・下がった点などの項目）を行った。これらの集計結果については、今後、実習指導に生かすとともに、学生にも公表して学生自身の実習準備の一助にしたいと考えている。

発表 1

これで明日からでも実習に出られる

森川 祥彦（臨床実践薬学研究室）

私はⅢ期にて加古川市にありますイダ調剤薬局にて実務実習をさせていただきました。不安と期待を胸に抱き、実習に臨みましたが、毎日が充実しており、2.5ヶ月という期間もあっという間に過ぎ去っていきました。

このスライドでは、私が実習を通して体験したこと感じたことを紹介しています。これから実習を体験される方々に少しでも参考になればと思っています。

スライド 1

薬局紹介

- ・イダ調剤薬局
- ・薬剤師 : 3人
事務員 : 2人
- ・1日処方せん枚数: 約40枚
- ・主な処方: 精神科
- ・特徴: OTC医薬品が豊富



まず実務実習をさせていただいた薬局の紹介を行い、その後実習の流れや実習を通して感じたこと、これから実習をされる方へのアドバイスなどを載せていきたいと思います。

スライド 2

受付



調剤室



薬局内の様子です。

薬剤が適応ごとに配列されていました。

ポイント

最近ではジェネリックなども数多くでており、患者様のなかには特定の医薬品を指定される方もいらっしゃるのですが、需要に応えるべく、多くの医薬品が取り揃えてありました。

初めはどこに何の医薬品があるのか困りましたが、日にちを重ねるごとにだんだんと慣れてきました。

スライド6

薬局実習の
ここが醍醐味

- ・実際の医療現場が感じられる
- ・患者様との距離が近い
- ・地域との結びつきが強い医療

■実際の医療現場が感じられる

病院実習でも共通して言えることですが、医療の現場としての緊張感が感じられます。

人々の健康に関わる職業として「全力で」医療に取り組まれている、そんな薬剤師の姿を見ることができました。

■患者様との距離が近い

病院とは違い、待合室から調剤の風景も見えるため、緊張しました。

物理的にも精神的にも患者様により近い立場にあると思います。

また、患者様に体調を訊ねたり、コンプライアンスの確認を行ったりと、より患者様に寄り添った対応が必要だとわかりました。

■地域との結びつきが強い医療

地域の薬局として、学校薬剤師としての活動や、地域の方々の相談に応じたりなど、薬局薬剤師はより「生活に密着した」医療に携われるように感じました。

スライド7

実習中の

心得

過度に落ち込まない
be nice to yourself

積極性
forwardness

誠実であること
in good faith



■過度に落ち込まない

失敗したり、落ち込んだりすることも多々ありますが、いつまでも落ち込んではいけません。気持ちの切り替えも大切だと思います。

また、時には自分で自分を励まし、自身を追い込まないことも大切です。

■積極性

自分から進んで学んでいく姿勢が大切だと思います。

わからないことは薬剤師の方にすぐ聞くなどして、わからないことをそのままにしておかないことも重要です。

■誠実であること

患者様への対応などを通して医療者としての誠実な態度について学びました。

スライド8

～実習7つ道具～



ノート(ポケットサイズ)
ボールペン(赤・黒...)
医薬品集
判子
テキスト
クリアファイル

熱い心

実務実習を効果的に行うためには準備が欠かせません。

実習テキストはもちろん、学校の教材なども知識の確認などの役に立ちます。

こまめに自分で調べることが大切だと思います。

ポイント

気がついたことや感じたことなどをすぐにメモしておくことが大切です。

後で見直すことで自分の成長が感じられるとともに、知識の確認にも役立ちます。また、失敗したことのチェックにも使えます。

ポケットサイズのメモ帳を用意しておく
といいと思います。



スライド9

これからの薬剤師像

【ポイント】

意欲

責任感

薬剤師過剰の時代がくるといわれていますが、それは「いままでの」薬剤師の場合だと思います。いま、医療現場での薬剤師の必要性が増しているとともに、職域も拡大しています。それらに応えていくためにも、進んで知識・技術を学んでいく「意欲」と、薬の専門家としての「責任感」が大切ではないかと感じました。

スライド10

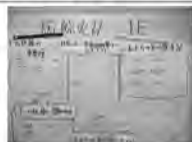
最後に



薬学教育協議会フォーラム2011
初年度実務実習の成果と課題～学生からのフィードバック

学生側の意見

- ①学生はもっと積極的であるべき
- ②後輩へフィードバックすることの大切さ
- ③薬剤師の地位向上
- ④実習施設ごとで経験できることの格差の是正（他施設と協力することの大切さ）
- ⑤大学では現場に沿った教育をして欲しい



最後に、平成23年2月に東京にて行われました薬学教育協議会フォーラムについて書かせていただきます。

フォーラムでは各大学の学生が数グループごとに分かれて実習についてディベートを行う機会がありました。最後にグループごとに話し合った内容を発表しました。

学校ごとの実習についてのポスター発表などもあり、他の学校の取り組みを学べるとともに、学生同士で体験を共有できたり、別の考え方を感じられたりと、とても有意義にすごすことができました。

これから実習にいかれる方々が有意義な実習を経験できることを願っています。

最後まで見ていただき、ありがとうございました。

Keep your fingers crossed!

発表 2

薬局実務実習での経験で学んだ事

五十嵐 圭史（医薬品化学研究室）

私は、Ⅲ期実習で大阪市港区にある、なぎさ薬局で実習を行いました。今回の実習を通して学んだ事についてお話させていただきます。

本日の発表内容

1. 地域で活躍する薬剤師

2. 印象に残った体験

- 2-1. 訪問看護同行
- 2-2. イレッサ裁判傍聴
- 2-3. 府庁へ麻薬廃棄

3. まとめ

発表内容は、地域で活躍する薬剤師、印象に残った体験としまして訪問看護同行・イレッサ裁判傍聴・府庁への麻薬破棄、そしてまとめです。

今回の実習を通して、地域における薬剤師の存在が大きい事を実感しました。どのような点から薬剤師の重要性を感じたかをスライドに載せました。週に数回、患者宅を訪れて、体調確認や薬の配置をしている場面を見る事ができました。患者さんだけでなく、介護者にも分かりやすいように薬箱を作っている事や、コンプライアンスの悪い患者さんに対しては、コンプライアンス改善のために何が必要かを患者さんと話し、医師に提案する場面も見ることができました。薬物治療において、薬剤師の重要性を感じた瞬間でした。また、薬局に隣接する診療所やデイケアスタッフと月に1回の会議がありました。私が出席した会議では、徘徊が多い認知症患者さんに対して、徘徊をなくすためにどのような対策をするべきか、薬の管理方法をどうするか等、細かい部分まで話し合いが行われていました。

また、定期的に行われている地域の方々をまねいての勉強会では、薬に関する話だけでなく、リウマチなどの病気に関する話を分かりやすい言葉で詳しく説明していました。専用の器具を使っての血圧測定や血管年齢測定も行い、病気についての意識付けや、病気の早期発見につなげ地域医療に貢献する薬剤師の姿を見る事ができました。与薬時の服薬指導では、服薬説明はもちろんの事、血圧・血糖値・睡眠の度合いなど体調に変化がないか、一人一人の患者さんに細かな確認を行っていました。薬局に来局される患者さんのほとんどが自ら話をしている点にも気付きました。日々の細かな服薬指導、患者目線に立っての服薬指導を

1. 地域で活躍する薬剤師

・患者宅を訪れて...

残薬チェック(コンプライアンス確認)、体調確認(有効性と副作用確認)薬の配置。

・患者さん、介護者が分かりやすいようにメモ書きを添える
指等で服薬しやすいようにオリジナルの薬箱を作成

・隣接する診療所、デイケアスタッフとの月1回の会議

医師、看護師、ケアマネージャー、ヘルパーと患者さんに対しての問題点等の意見交換

徘徊が多い認知症患者さんに対するアプローチ方法
コンプライアンスの悪い患者さんに対して薬の管理方法etc

・地域の方々をまねいての勉強会

病気についての話、血圧測定、血管年齢測定、漢方薬についての話。

飲み方、副作用、漢方薬の歴史など
細かい内容まで説明していた。

病気についての意識付け、病気の早期発見につなげる。

・与薬時の服薬指導

服薬説明だけでなく、細かい体調変化のチェック(血圧、睡眠確認など)を行う。
時には、世間話を交えて患者さんの状態を確認。

細かい服薬指導から信頼関係の構築

2-1. 訪問看護同行

看護師さんと患者宅を訪問し訪問看護記録の作成、各種ケア。
実際に薬剤師さんが訪問看護同行は行わないが、地域医療の実態を確認すると言う事で、同行の機会を設けて頂いた。

103歳女性

血糖コントロール、じょくそうケア、輸液による栄養摂取。

看護師の情報より・・・患者さんによって、かぶれる、かぶれない軟膏ある。
薬剤師として患者の状態を把握し適切な薬が処方されるようにする必要がある。

86歳男性

肝炎治療、尿失禁。
尿失禁の薬処方されるが、むくみがひどいため、フロセミド処方。→尿失禁ひどくなる。
→今後の処方どうするか医師、薬剤師と検討が必要。

看護師と薬剤師の連携が大切だと実感

患者さんを介護しているご家族から、薬剤師の卵である私に薬についての質問が多数あった。

分かる範囲で答えたが、しっかりと返答できない自分に悔しさを覚える。

それと同時に、地域の方々が薬に関する疑問をたくさん抱えている事に気づく。

2-2. イレッサ裁判傍聴

2011年2月26日

肺がん治療薬「イレッサ」の初めての判決が下された大阪地裁の裁判を傍聴。

<イレッサ裁判とは？>

販売直後、わずか3カ月の間に間質性肺炎で13人が死亡。
遺族が国と製薬企業に損害賠償を求めて訴訟を起こす。

大阪地裁では勝訴。企業側に責任があるとして遺族に賠償金を支払う。

しかし、国側には責任がないとの判決に
遺族側は再び立ち上がる

その後、3月23日の東京地裁では添付文書の記載に不備があったとして、
国と企業に責任があるとの判決が出された。

<裁判傍聴と遺族会から感じた事>

- ・副作用と薬害の境界線がどこにあるか判別の難しさ。
- ・企業側のあり方として、利益追求を第一に考えずに患者貢献を最優先する必要があると再確認。利益と患者貢献のバランスをとる事が大切。医療人としての命に対する認識が必要。
- ・今回の裁判では、企業と国に責任があると結論が出たが、重篤な副作用を防ぐためにも、医師、薬剤師の責任も極めて重い事も再認識。
- ・遺族の声として・・・
重篤な副作用が出た場合やイエローレーター等が出された時には隠さずに迅速な情報提供をしてもらいたい。
患者さんは処方された薬を信じて服用している。

薬剤師として、副作用情報をしっかりと把握しておく必要があり、患者さんに対して副作用情報の提供と収集はこまめにかつ迅速に行う必要がある。
患者さんは薬剤師を信用している。

する事で、患者さんとの信頼関係を構築しているように感じました。これらの経験から、地域医療における薬剤師の重要性や、患者さん一人一人に合わせた地域医療を実践している事に気付きました。

訪問看護同行では、看護師さんと共に患者宅を訪問し、看護記録の作成や各種ケアを行う現場を見学させていただきました。血糖コントロール、じょくそうケアを行っている103歳の女性や、肝炎治療、排尿障害の患者さん、寝たきりの患者さんなど様々な患者宅を訪れました。じょくそうケアでは、患者さんによってかぶれる軟膏がある事や、軟膏が塗りにくいなどの問題が発生する場合があります。このような問題は患者宅を訪問する看護師にしか分からない情報なので、患者さんがよりよい治療を受けるためにも、地域における看護師と薬剤師の連携が大切になってくると実感しました。また、同行中に患者さんを介護しているご家族や患者さん本人から、薬剤師の卵である私に薬についての質問がたくさんありました。分かる範囲で答えましたが、しっかりと返答できない自分に悔しさを覚えたと同時に、地域の方々が薬に関する疑問を多く抱えている事に気付きました。

印象に残った実習の一つとして、2月26日に大阪地裁で行われたイレッサ裁判の傍聴がありました。裁判傍聴や遺族の方々の話から、人の命を救う製薬企業の在り方や、薬剤師としてどのように患者さんに接していくべきか深く考えることができました。

製薬企業は、利益を得てよりよい医薬品を創り出していますが、利益追求だけを第一に考えずに患者貢献を最優先する必要があると再確認しました。「患者貢献の先に企業の利益がある」これが最善の考えだと感じました。今回の裁判

では企業と国に責任があるとの判決が下されましたが、重篤な副作用を防ぐために医師、薬剤師の責任も極めて重いと感じました。リスクなく薬物治療を行うことは、不可能に近い事だと思いますが、リスクを軽減することは可能だと考えます。少しでも副作用のリスクを減らすために、製薬企業を含め、すべての医療従事者は問題点があがったら、包み隠さずに迅速な情報提供を行うべきだ

と思いました。

麻薬破棄見学では、期限切れの麻薬を破棄するため大阪府庁に行き、実際の麻薬破棄を見学する事ができました。破棄方法はもちろん条文通りに行われていましたが、想像以上にあっさり終わったと言うのが正直な感想です。しかし、医薬品ひとつを破棄するために、わざわざ府庁に行ったことや、麻薬管理簿に様々な記載事項があったことから、

麻薬乱用を防ぐために、取り扱いが厳格に行われている事を再認識しました。これまでに学校の授業で麻薬破棄方法は学んでいましたが、実際に破棄現場を見る事で、その方法を確実に習得することができました。

今回の実習を通して、地域に根差した薬局の重要性に気づきました。そして、地域医療を支えていく中で薬剤師の存在は大きく、他の医療従事者と密に連携をとっていく事が大切だと感じました。

11週の長期実習だからこその様々な経験をした結果、薬剤師として必要な知識や技術だけでなく、医療従事者としての心得を習得できました。実習で体験することは、実習先で異なるとはありますが、積極的に実習を行うことでよりよい実習になると考えています。また、実習で学んだことを就職活動中に製薬企業の面接で話す事もできました。進路先が病院や薬局の薬剤師でないという方も自分自身の成長につながりますので、日々新しい発見をすると言う気持ちを大切に実習に取り組んでいただきたいと思います。

2-3. 大阪府庁へ麻薬廃棄

麻薬及び向精神薬取締法 第29条

麻薬を廃棄しようとする者は、麻薬の品名及び数量並びに廃棄の方法について都道府県知事に届け出て、当該職員の下行わなければならない。ただし、麻薬小売業者又は麻薬診療施設の開設者が、厚生労働省令で定めるところにより、麻薬処分せんにより回収された麻薬を廃棄する場合は、この限りでない。

実際に、この条文に従って廃棄した。

Ex) 期限切れのデュロテップパッチは粉々に
・アンベック坐剤はお湯と洗剤で溶かし収集不能に

麻薬を廃棄するために、わざわざ府庁に行った事や、麻薬管理簿に廃棄した日付・数量・廃棄者の名前などの記載があった事から・・・

麻薬乱用を防ぐために、取り扱いが厳格に行われている事を再認識。

麻薬の廃棄方法などは教科書で学ぶ事もできるが、実際に体験する事で、その方法を確実に習得できた。

3. まとめ

・地域医療を支えていく中で、薬剤師の存在は大きい。

・薬剤師として必要な知識、技術の習得ができる事ももちろん、医療従事者として考えておくべき事を習得できた。

・導入実習で学んだことが確認でき、更に新しいことも学べた。

・5年生に伝えたいこと

実習で体験する事は、実習先によって異なると思いますが、受身にならず積極的に実習に取り組んでください。

進路先が薬剤師でない人へ・・・

実務実習では、本当に多くの「学び」がありました。自分自身の成長の場にもつながります。

自分には関係ない事と考えずに・・・

日々新しい発見をする気持ちで実習に臨んでください

発表 3

川端 秀明（生体機能診断学研究室）



第3期に近江八幡総合医療センターで実務実習を受けた。

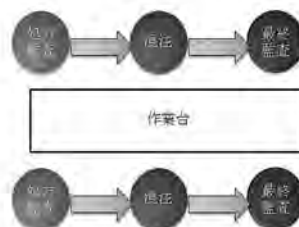
近江八幡市立総合医療センターは滋賀県近江八幡市にあり、病床数407、診療科31、薬剤師数14名の急性期病院である。

当院は初診・再来受診ともに全て予約制になっており、緊急を要さない場合は診療所を受診し、必要に応じて診療所からの紹介状をもって病院を受診するという形をとっている。これにより病院と診療所が機能分担をし、病院は高度医療・急性期病院へ特化していくことが可能になる。

さて、本題に入るが、ここでは実習での体験について特に印象に残った内容として「サテライトファーマシーにおける輸液の混合業務」、「模擬当直の体験」、「沖島診療への参加」の3つを紹介したいと思う。

まずサテライトファーマシーにおける輸液の混合業務であるが、当院では3階と4階に輸液の混合業務を行うサテライトファーマシーを有している。ここでは末梢輸液の混合業務を薬剤師が中心となり、看護師の協力を得て、3人1組で行っている。輸液の混合業務に薬剤師が関わることでより無菌的な調製、及び薬学的な相互作用のチェックが可能になる。

混注作業の流れ



つぎに模擬当直の体験であるが、薬剤部では毎日1名が日勤終了後、翌日の午前まで続けて勤務する。私は普段の実習終了後22時まで体験させて頂いた。業務内容は主に夜間診療で発行された処方箋の調剤や、医師や看護師からの問い合わせへの対応である。夜間の受診は予約制ではなく、紹介状も不要である。

当直

- 通常の実習終了後、22時まで体験
- 夜間診療にて発行される処方箋は緊急を要するものは無く、翌日の受診で間に合う程度のものが多い
- 当日は普段より患者数が少なかった
→悪天候の影響



このためか私が当直していた時間帯に限って言えば緊急を要する症状の患者は1人もおらず、明日以降の受診で十分間に合う程度のものが多いという印象をうけた。

あくまで私個人の予想であり一概にはいえないが、このような患者が多くなれば病院と診療所で役割分担する意味が失われ、本当に緊急を要する患者を助けることが困難になる恐れがあると思う。

最後に沖島診療について述べる。沖島とは琵琶湖に浮かぶ人口約450人の島で、淡水湖に浮かぶ有人島は世界でも珍しいとされる。

沖島診療は病院から薬剤師、看護師、事務員各1名、及び市内の開業医1名の計4名で構成されており、週1回、沖島の公民館の一室を診療スペースとして借りて診療を行っている。主に慢性疾患の患者が対象で、病院で前回と同じ処方を1ヶ月分予製しておき、当日の診療で変更があれば沖島の診療スペースに備蓄してある医薬品で対応する。対応できない場合は病院に持ち帰って調剤し直し、後日患者宅へ郵送するという形をとっている。

沖島における医療の問題点として私が感じたことはまず島に常在の医師がいないことである。このため島民は島を出て病院まで行く必要があるが、その交通が不便で、島から港まで連絡船で約30分、さらにバスで約30分かかる上に本数が少ないのでさらに時間がかかることが予想できる。

次に沖島の診療スペースは狭く、設置できる医療機器や備蓄薬に限りがある。例えば薬袋は手書き、備蓄薬は100種類程度というように通常の診

沖島における医療の問題点

- 常在の医師がいない
- 島から病院までの交通が不便
→連絡船で30分、さらにバスで30分
- 診療スペースが狭く、備蓄できる薬剤や設置できる医療機器に限りがある
- 処方の変更に対応しづらい
→備蓄薬は100種類程度



<http://page22.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/71030096>

沖島での診療

- 当院より薬剤師、看護師、事務員各1名ずつ、及び市内の開業医1名の計4名で構成
- 週1回、沖島の公民館で診療を行う
- 主に慢性疾患の患者が対象で、薬剤部で前回と同じ処方を1ヶ月分予製しておき、当日持っていく

まとめ

- 上記以外にもカンファレンスの見学、抗がん剤の混注業務など様々なことを経験。
- 病院薬剤師の業務は非常に多岐にわたり、医師をはじめ多くの医療従事者との連携が不可欠。
- 病院と診療所との連携、あるいは病院と薬局との連携(薬薬連携)がより良い地域医療に繋がる。

療所や薬局としての機能は十分に果たせない状態である。

しかしそれでも島民にとっては島をでることなく受診することができるので大きな意味を持つと

考えられる。また、診療スペースは診療所や薬局といった区切りがなく、全職員が1つの部屋で業務を行うので医師と同じ場所で業務ができ、互いのコミュニケーションをとりやすい状況であるので薬剤師としてもやりがいのある業務であると思う。

最後に約3ヶ月の病院実習を終えて、今回述べたこと以外にも多くのことを体験することができ、病院薬剤師の業務は非常に多岐にわたり、責任のある仕事であると気づくことができた。また、病院内の医師や看護師など様々なスタッフとの連携、さらには病院と診療所や薬局との連携が重要であり、これがより良い地域医療に繋がっていくということがわかった。

発表4

薬局実務実習での集合型実習について

井上 味波（臨床薬剤学研究室）

私は第Ⅱ期に大阪府中央区にあるワカノウラ薬局にて集合型実習を行わせていただいたので、その報告をさせていただきます。



集合型実習

- 実習時間 毎週金曜日 午後1時から
- 実習場所 南薬剤師会 事務所にて
- 参加者 指導薬剤師 1名
学生 6名
(大阪薬科大学3名 近畿大学2名 摂南大学1名)

- 実習内容
 - ・製薬メーカーのMRさんによる勉強会
 - 病態、薬剤の説明
 - 学生の質問、ディスカッション
 - ・演習形式の実習 (薬害、疑義照会など)

集合型実習は毎週金曜日の午後1時から指導薬剤師の先生1名と、同じ地域で実習を行っている学生6名で行いました。

毎週様々な製薬メーカーのMRさんに来ていただき、色々な疾患・治療薬についてのお話をし

ていただき、その後にMRさんを交えたディスカッションを行いました。

薬害や疑義照会などのテーマについて、学生主体での演習形式の実習も行いました。

少人数で和気藹々とした雰囲気の中で行われ、6人の様々な視点からの意見がたくさんでたことでとても活発な実習を行うことができました。

集合実習の一環として参加した活動

- ・卸センター見学
- ・休日診療所見学
- ・老人健康施設見学
- ・薬剤師会の勉強会
- ・市民のつどい
- ・毒劇物の取り扱い講習会(警察署)
- ・禁煙支援
 - 『府民の集い』での禁煙支援活動
- ・学校薬剤師実習
 - 水質検査、照度検査、講演会
- ・健康展での啓発活動
 - 啓発ツールを用いた啓発活動

薬局薬剤師の活躍の場を学ぶことができた

毎週の実習以外にも6人で様々な場所の見学や勉強会にも参加させていただきました。

6人で参加することで見学後に意見交換ができたり、それぞれの場所で活躍する薬剤師の先生方にもたくさんお話を聞くことができ、薬剤師の活躍の場を学ぶことができました。

今回はこの中で健康展での啓発活動について紹介させていただきます。



啓発活動は昨年の10月に中央区で行われた健康展において、6つのテーマについて学生それぞれが一題ずつ担当し、啓発ツールを作成して啓発活動を行いました。

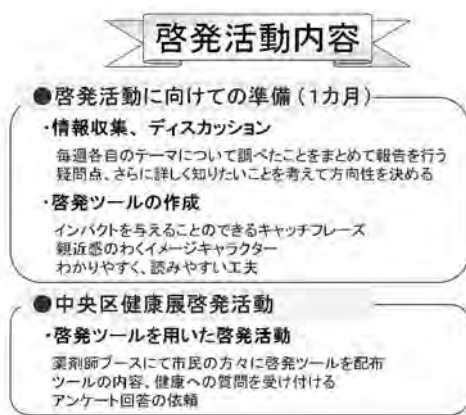
その後学生6人で疑問点やさらに調べたいこと、どのような情報を提供するかにについてディスカッションしました。

市民の皆様に配布する啓発ツールの作成では、ただ情報をのせるだけではなく、キャッチフレーズやイメージキャラクターを考え、誰でも分かりやすく読みやすいようなレイアウトの工夫なども話し合いました。

当日の啓発活動では薬剤師ブースに学生用のブースも設けていただき、市民の方々に啓発ツールを配布したり、質問や健康への質問などを聞いてお話をさせていただきました。



啓発ツールの例



一ヶ月間で各自のテーマについて情報収集を行い資料作成をして報告を行いました。



啓発活動当日、白衣を着た学生たちが市民の皆さんとお話しているところです。

啓発活動は薬学生としては初めての試みでした

集合型実習を終えて

●自主的な実習

学生達で活発にディスカッションを行うことができた
薬局の業務だけでなく様々な場所に出向いて実習を行った

●多くの方々との出会い

様々な薬局の先生・MRさんと関わることができた
色々な立場の人から勉強になる話をたくさん聞かせて頂いた

●他大学の学生との絆が深まった

実習中の不安、大学生活、就職活動についての情報共有
前向きでやる気のある学生ばかりで非常に刺激を受けた

定期的に実習生同士で情報提供できたことで
実習へのモチベーションが上がり
より有意義な実習となった

実習に向けてメッセージ

●実習中にしかできない経験に挑戦

積極的に何事も興味を持って取り組む事で実習がより充実
色々な事を経験できる機会にチャレンジしてみることが大切
様々なきっかけを通じてたくさん学ぶ事ができる

●自分が一番成長できる時間

実習中が大学生活において一番充実した日々だった
自分と向き合って考える機会がたくさんあった
進路についてもじっくりと考える事ができた

●実習中の出会いを大切に

実習先の先生方、実習生とのつながりを大切に
実習終了後も相談に乗ってもらえるような関係を築きたい



が、市民の皆さんや周りの薬剤師の先生方にもとても高評価をいただきました。

参加した学生自身も、自分たちだけの力で責任ある実習を終えることができ、自信につながるいい経験ができたと思っています。

集合型実習ではとても自主的な実習を行うことができました。

実習で関わった先生方は実習に対して熱心に取り組んでくださり、温かく学生の活動を見守ってくださったおかげで有意義な実習ができました。

他大学の学生も含めた複数の学生と共に実習ができたことで、実習中の不安や、大学生活、就職活動についての情報共有が定期的にできたので、

実習へのモチベーションがさらに上がり、集合型実習に参加できてよかったと思いました。

実習中にしかできない経験には積極的に何事にも興味をもって取り組むことで、実習がより充実した楽しいものになると感じました。

それらの経験を通し、自分の将来について、より具体的に思い描くことができるようになりました。

何よりも、実習中にお世話になった実習先の先生方や実習生との出会いとつながりをこれからも大切にしたいです。

これから実習に行かれる5回生の皆さんも、実習先での出会いは大切にしてほしいと思います。

発表 5

これが先輩たちの生の声 !!

沼田 浩貴 (薬剤学研究室)

H22年度実務実習伝達・報告会
～これが先輩たちの生の声！！～

京都第二赤十字病院(京都市・上京区)

薬剤学研究室
沼田 浩貴

それでは発表させていただきます。

先の6回生からの発表にもありましたように、実習中は大変貴重な経験を積むことができます。しかし、その一方で多くの困難に出会った学生もいました。

その原因はなんだったのでしょうか。学生が悪いのか、それとも受け入れ施設側に問題があったのか。その原因を探り、実習をより有意義に過ごして頂きたいと考え、私は次のアンケートをとりました。

アンケートの内容です。

1. 実習がカリキュラムに加わったことが良かったかどうか。
2. 病院実習と薬局実習のそれぞれ良かった点、悪かった点について。
3. 自分の将来像を決める上で実習がどのように影響したか。
4. 実習を通して自分自身の反省点と成長した点について。

アンケートは私の友人、102名に配布し、63名から回答を頂きました。

まず、実習が薬学部のカリキュラムに加わってよかったと思いますかという質問についてです。今回の結果ではおよそ9割の学生からポジティブな回答を得ることができました。長期実務実習が導入された1年目としては大変よい結果だと考えます。しかし、ネガティブな回答をしている学生がいることを忘れてはいけません。このような結果になった理由を次の回答から考えていきたいと思います。

<方法>

薬学生にアンケートをとり、そこから得られた情報について考察を行う。

アンケート内容

1. 実習がカリキュラムに加わったことが良かったかどうか。
2. 病院実習、薬局実習のそれぞれ良い点、悪い点について。
3. 自分の将来像を決める上で実習がどのように影響したか。
4. 実習を通して自分自身の反省点と成長した点について。

<結果>

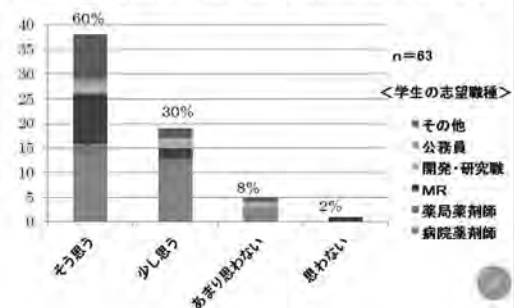
薬学生の内訳(102名)

<回答>	大阪薬科大学	57名
	京都薬科大学	3名
	京都大学	1名
	摂南大学	1名
	同志社女子大学	1名

合計 : 63名
回答率 : 61.8%

＜結果①＞

実習が薬学生のカリキュラムに加わってよかったと思いますか？



＜結果②＞

病院実習の良かった点、悪かった点を教えてください

＜良かった点＞

- ・TPNの混注、抗がん剤の調製、麻薬の破棄等貴重な経験ができた
- ・カルテや検査値から患者さんについて考えることができた
- ・他部署やオペを見学することで患者さんが受ける治療を学べた
- ・チーム医療を肌で感じることができた

＜悪かった点＞

- ・指導薬剤師が忙しいときは自習になることが多かった
- ・受け入れ先によって学べることや感じるが違うので学生間で不満がたまっていた
- ・一人の患者を長い期間みたかった
- ・座学が多すぎた

＜結果②＞

薬局実習の良かった点、悪かった点を教えてください

＜良かった点＞

- ・薬局が地域医療に貢献していることを感じとれた
- ・在宅医療を経験させてもらった
- ・OTCの知識が身についた
- ・漢方薬局について具体的に知ることができた

＜悪かった点＞

- ・仕事内容が限られているため後半は作業のようになっていた
- ・店の信用に関わるからという理由で服薬指導をさせてもらえなかった
- ・病態がわからないので服薬指導の際に何を言えば良いかわからなかった

＜結果③＞

自分の目指す将来像に実習はどのように影響しましたか？

臨床現場の薬剤師を目指す人

- 目指したい薬剤師像が見えた
- 業務の実態を経験することでギャップを感じることも働けると思った
- 病院薬剤師に必要なスキルを把握できた
- 在宅医療を行い地域の健康を守る薬剤師になりたいと思った
- どんな病院(診療科、病床数)で働きたいか明確になった

その他の職種を目指す人

- より良い薬を求めている患者の存在を知ることができた
- 実習がなかったら倫理観のない単なる科学者になっていた
- 臨床現場がMRに求めていることがわかった
- 自分は薬剤師よりも営業に向いていると思った

病院実習の良かった点と悪かった点についてです。

良かった点では、「カルテや検査値から患者さんについて考えることができた」、「他部署やオペを見学することで患者さんが受ける治療を学べた」、悪かった点では、「受け入れ先によって学べることや感じるが違うので学生間で不満がたまっていた」という回答がありました。

薬局実習の良かった点と悪かった点についてです。良かった点では、「薬局が地域医療に貢献していることを感じとれた」、「在宅医療を経験させてもらった」、悪かった点では、「仕事内容が限られているため後半は作業のようになっていた」、「病態がわからないので服薬指導の際に何を言えば良いかわからなかった」という回答がありました。

これらの回答からもわかるように、病院、薬局それぞれの特色を学生が感じる事ができたようです。これはこれまで以上に長い実習を経験できたことに起因すると考えます。

しかしながら、施設間での実習内容の違い等、問題点が浮き彫りになったことも確かです。

自分の目指す将来像に実習はどのように影響したかという質問です。

臨床現場で薬剤師として働きたいと考えている学生からは、「目指したい薬剤師像が見えた」、「どんな病院(診療科、病床数)で働きたいか明確になった」という回答が、また他の職種を希望する学生からは、「実習がなかったら倫理観のない単なる科学者になっていた」という回答がありました。

目指している職種に関係なく、すべての学生にとって実習は将来を考える上で貴重な時間になったと考えます。

実習中の反省点についてです。

態度に関しては、「受け身な態度をとっていた。例えば質問をしない、先生からの指示を待っていた」、「毎日目標をもって取り組めばよかった」という回答が、知識に関する部分では「相互作用、配合変化の知識が乏しいため、処方鑑査ができなかった」、「授業で習った知識を整理できていなかった」という回答がありました。

知識については、実習前に復習しておくことに

<結果④>

実習を振り返って反省点はどのようなことがありますか？

感 度	<ul style="list-style-type: none"> ・薬に対して日頃から関心をもっておけばよかった ・受け身な態度をとっていた(質問をしない、指示を待っていた) ・復習予習を行い、毎日の実習を活かす努力をするべきだった ・毎日目標をもって取り組みればよかった ・患者さんと話すことを恐れてしまった
知 識	<ul style="list-style-type: none"> ・輸液の勉強をもっとしておけばよかった ・相互作用、配合変化の知識が乏しいため、処方監査ができなかった ・医薬品の知識を系統的にまとめながら勉強すればよかった ・授業で習った知識を整理できていなかった

<結果④>

実習を振り返って成長できた点はどのようなことがありますか？

社会人になる前に成長してよかったと思う点	<ul style="list-style-type: none"> ・よくするミスを振り返ることで、性格を見直すことができた ・患者や他の医療スタッフと話すことに抵抗がなくなった ・あいさつを元氣よく行う習慣がついた ・様々なことを両立する力がついた (就職活動、実習、アルバイト、プライベート) ・物事を考える際に、他の事と関連付けて深く幅広く考える習慣がついた ・人の気持ちを考える習慣がついた ・自信がついた
医療人になる前に成長してよかったと思う点	<ul style="list-style-type: none"> ・医療人としての心構えができた ・命の大切さを考えることができ、将来自分が就こうとしている職業の責任の重さを理解できた ・薬だけでなく疾患の知識が身についた

<結語>

実習をより良くするために必要なことは？

学生に関しては、日頃から医療に関心を持ち、実習は尊い経験であることを理解し、実習中も向上し続ける姿勢をもつべきである。大学では、より臨床に近い授業を行い、学生がスムーズに実習に取り組めるカリキュラム作りが必要ではないでしょうか。また、今回第3期で浮き彫りになった就職活動の問題に関しては、大学内、各大学間、製薬企業で意思統一をはかってほしいと思います。臨床現場の先生方には医療人として、また教育者として実習生に厳しくも温かいご指導をして頂ければ幸いです。そして、地域間で先生方が情報交換を行って頂くことでより良い実習が生まれるのではないのでしょうか。

最後に、皆さんにメッセージ！！

泣いても 笑っても
たったの5ヶ月！
それなら、お互いにとって
有意義な時間を送って下さい。
(指導薬剤師言)

1つの出会いを大切に ♥

越したことはありませんが、それよりも大切なことは実習中の態度ではないでしょうか。

先輩が感じた反省を繰り返すのではなく、「私はこれだけはがんばる」といった目標を毎日もって5ヶ月間を過ごしてほしいと思います。

最後は実習中に成長できた点についてです。

社会人になる前に成長できてよかったと思う点については、「様々なことを両立する力がついた」、「物事を考える際に、他の事と関連付けて深く幅広く考える習慣がついた」という回答が、医療人になる前に成長できてよかったと思う点については「命の大切さを考えることができ、将来自分が就こうとしている職業の責任の重さを理解できた」という回答がありました。

大学を離れ、医療の現場という厳しい環境だからこそ人間性を高めることができた振り返る学生は多かったようです。

以上のアンケート結果から、今後も続いていく薬学部の長期実務実習をより良くしていくために必要なこととして私は次のことを提案させていただきます。

まず学生に関しては、日頃から医療に関心を持ち、実習は尊い経験であることを理解し、実習中も向上し続ける姿勢をもつべきだと考えます。

また大学では、より臨床に近い授業を行い、学生がスムーズに実習に取り組めるカリキュラム作りが必要ではないでしょうか。また、今回第Ⅲ期の実習で浮き彫りになった就職活動の問題に関しては、大学内、各大学間、製薬企業で意思統一をはかってほしいと思います。

そして、臨床現場の先生方には、医療人として、また教育者として実習生に厳しくも温かいご指導をして頂ければ幸いです。そして、地域間で先生方が情報交換を行って頂くことでより良い実習が生まれるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、私が病院実習の初日に指導薬剤師の先生から頂いたコトバを皆さんにお伝えして終わりたいと思います。

「泣いても笑ってもたったの5ヶ月。それならお互いにとって有意義な時間を送って下さい。1つの出会いを大切に。」

ご清聴、ありがとうございました。